

## 中部地区の産業史（その2）

安 保 邦 彦

### 目 次

- 第六章 徳川時代の治水・用水と干拓
  - 一 治水と用水
  - 二 新田開発
- 第七章 近代産業のめばえ
  - 一 時計製造の開始
  - 二 楽器の製造
    - イ 鈴木バイオリンの誕生
    - ロ 浜松にヤマハ（旧日本楽器）が生まれる
    - ハ ヤマハと鈴木バイオリン
  - 三 鉄道、港湾の整備
    - イ 武豊線の開通
    - ロ 武豊港の開港
    - ハ ビールづくりの動き
  - 四 基幹産業の台頭
    - イ 名古屋電燈の起こり
    - ロ 愛知電燈との合併
    - ハ 東海電気との合併
    - ニ 名古屋電力の登場
    - ホ 名古屋電燈の多難時代
    - ヘ 福沢桃助による名古屋電燈の買収工作
    - ト 名古屋電力との合併

### 第六章 徳川時代の治水・用水と干拓

#### 一 治水と用水

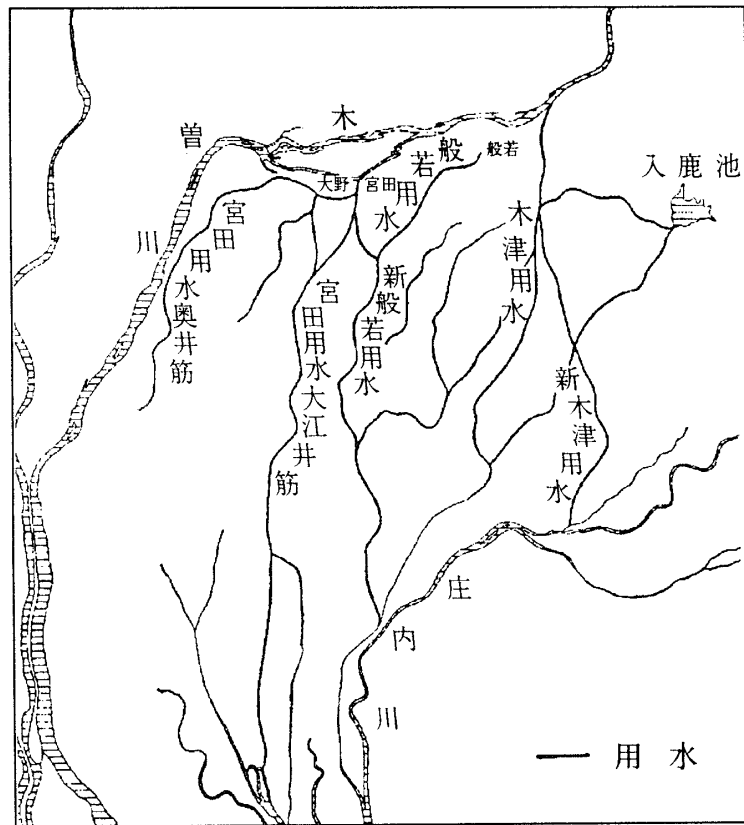
明治時代以降の中部地区産業の発展史をたどる前に、徳川時代の尾張平野の治水と用水について触れておこう。その後の近代産業を育てた

企業群の立地に密接な関連を持つからである。1607（慶長12）年4月、家康の九男、当時7歳の義直が清洲城主に任ぜられたことはすでに述べた。義直が、尾張に領地を与えられたのは、慶長14年で、翌15年には名古屋城の築城が始まっている。

これと併行して、木曾川の治水政策も進められていった。洪水対策や米の生産力を上げるため、慶長14年、小信川のほかに木曾川から尾張側へ分流する小河川の水路を断って木曾側主流に集めたのである。その際、犬山から海部郡の弥富までの約50\*<sub>0</sub>の尾張側に「御囲い堤」と称する堤防を築いた。この堤防は、工事を担当した家康の家臣、伊奈備前守忠次（いなびぜんただつぐ）の名を取って、「備前堤」とも呼ばれるが、美濃側（岐阜県）の堤防は、愛知県側より3尺低くすることを決めた。

木曾川の氾濫を抑え、尾張平野を豊かな土地にし名古屋城下を守る体制づくりとしたのである。それ以降、今日まで尾張側の堤防の破壊はないのである。しかし、木曾川から尾張平野へ流れる小河川を遮断したため水利が悪くなった。そこで、木曾川から用水を作り分水することにした。1909（慶長）年に大野杵、1619（元和5）年、般若用水、1628（寛永5）年、宮田用水、1650（慶安4）年には木津用水が尾張平

図1 尾張の用水図



出所：「愛知県の歴史」 p141

野を潤した。

さらに1633（寛永10）年には、入鹿村（現在の犬山市・明治村のほとり）の住民40戸余りを立ち退かせて入鹿池を築き、この池からの水路によって春日井、丹羽両郡にわたり、6,800石余の新田が開かれた。小牧村に移住した6人の浪人が発案者で、かれらは、発案者としてそれぞれ10石の地を年貢の免除地として与えられ、さらに木津用水、新木津用水の開発にあたるのである<sup>1)</sup>。

## 二 新田開発

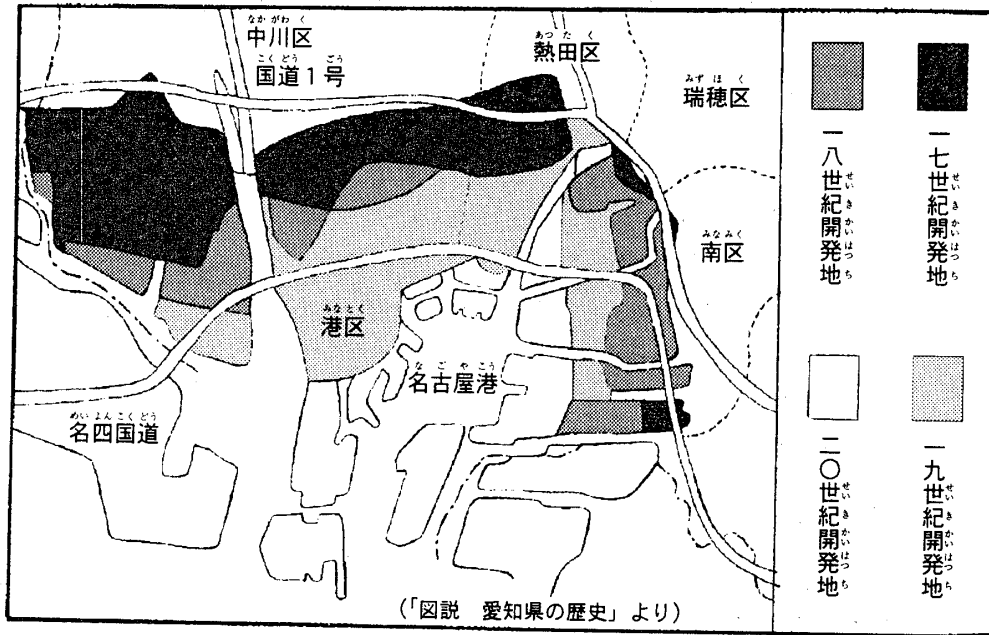
1959（昭和34）年、中部地区を襲い未曾有の被害を出した伊勢湾台風は、名古屋南部の工業地帯を水びたしにした。この地区は、17世紀初めまでは海だったからである。1647（正保4）年、尾張藩主義直は、家臣に命じて熱田の沿岸

を調査させ、そのため“御新田”と呼ばれる熱田新田を開発した。熱田の船着場の堤より西へ堤防を築き、東西4・7<sup>キロ</sup>、3,800石の新田で西木津用水より木曾川の水をひいた。

その後、干拓は、海岸に沿って西へ延び、木曾川河口の鎌倉新田（1648年）、庄内・日光川河口の善太新田（1658＝万治元年）、茶屋新田（1663＝寛文3年）、天宝前新田（1707＝宝永4年）などが開かれ、さらに熱田神宮南の天白川河口でも1744（延享元年）年に源兵衛新田ができた<sup>2)</sup>。

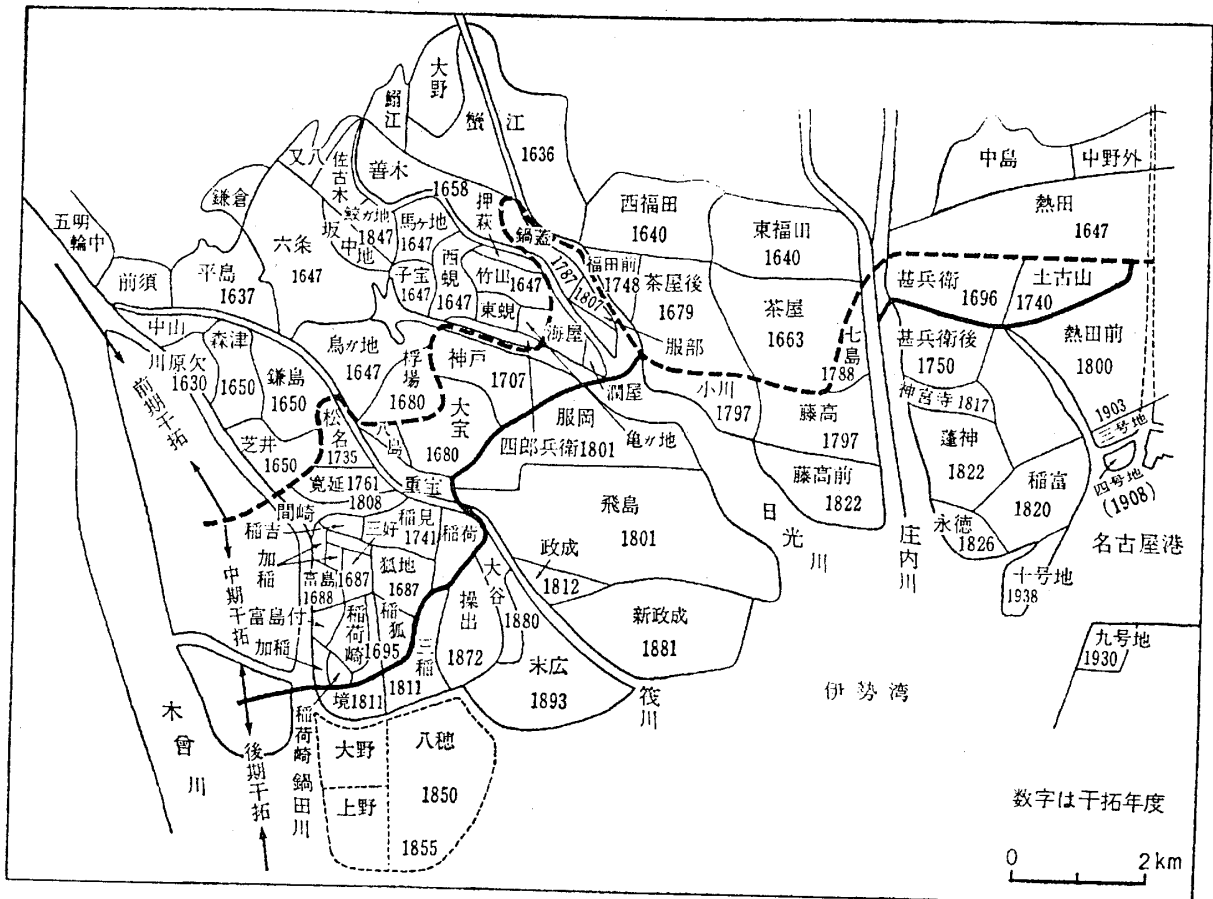
1803（享保3）年、熱田奉行、津金文左衛門は、徳川宗睦の許しを得て、熱田前（港区）に高さ7<sup>キロ</sup>、長さ6<sup>キロ</sup>の大堤防も築き、海をたんぼに替えている。これが熱田前新田（1649＝慶安2年）で、現在の愛知県海部郡、春日井郡から農民が移り住んだ<sup>3)</sup>。

図2 江戸時代の干拓図



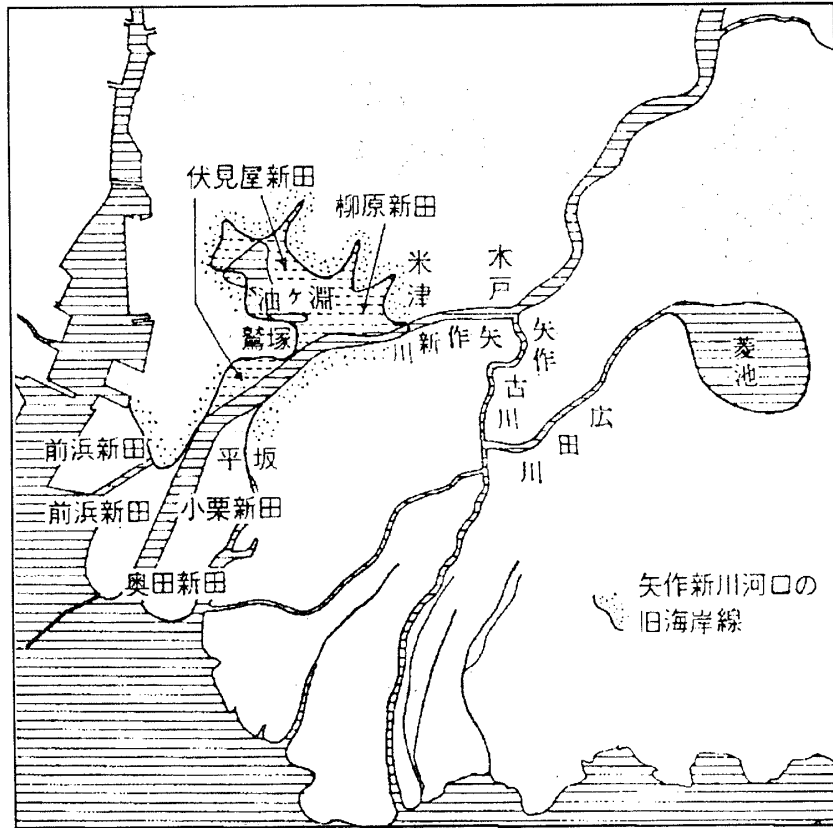
出所：「図説愛知県の歴史」 p 157

図3 名古屋南部の干拓図



出所：「愛知県の歴史」 p 171~172

図4 矢作川・矢作新川関係図



出所：「愛知県の歴史」 p141

当時の新田開発は、①藩が計画し、資金を出して経営する、②藩が、計画し資金は民間が出し工事をする、③有力商人、農民が計画から運営まで全てを行なうなどの方法があった。

藩が、直接に経営する例は、熱田新田がそうである。当初は、藩が、全てを行なうのが通例であったが、江戸時代中期以降は町人が、資金を用意し、工事を行なうことが多くなった。その際、新田の開発者は、領主に「地代金」を納め、その代わり開発した新田からは年貢免除地を受け取る仕組みになっていた。藩財政にとっては、地代金の収入は魅力的であった。

愛知県でも三河地方では、尾張のように大商人はいなかったため、名古屋や江戸の商人が新田開発に乗り出してきた。碧海郡南部の伏見屋新田は、江戸の商人伏見屋又兵衛によって開かれ1,200石の新田ができた。

## 第七章 近代産業のめばえ

明治政府は、殖産興業を進めるにあたって、貨幣制度を改め近代的な銀行制度を取り入れた。1873（明治6）年から国立銀行を設け金融機関の整備に力を注いだ。愛知県下で最も早く設立された国立銀行は、豊橋の第8国立銀行であった。一方、私立銀行は、1876年に三井銀行が、名古屋支店を開業している。続いて、1881年に伊藤銀行が、82年には、名古屋銀行が設立されている。

このうち、伊藤銀行は、いとう呉服店当主の伊藤次郎左衛門家による銀行であり、名古屋銀行は、呉服の老舗、瀧系の資本が多く、頭取に瀧兵右衛門が就任した。名古屋で二番目の私立銀行である同行は、地元の御用達商人や名古屋近郊の有力者による有力な金融機関となった。

1896（明治29）年、愛知銀行が、誕生した。旧尾張藩士や御用達商人ら地元の有力者による出資で、資本金は200万円、伊藤銀行の10万円、名古屋銀行の20万円と比べても規模の大きいことがわかる。

頭取には、岡谷惣助が就任し、すでに先発していた第十一国立銀行と第百三十四国立銀行は愛知銀行に吸収された。この伊藤、愛知、名古屋の3行は、1941（昭和16）年6月に合併し東海銀行となり、その後東海銀行は三和銀行と合併、今日のUFJ銀行へと続くのである。金融機関は、人間の体でいえば、動脈にあたるもの。このような金融機関の発展が、明治初期の名古屋の産業を支えていくのである。

#### 一 時計製造の開始

明治維新後の中部の主な産業といえば、織物、綿糸などの繊維、陶磁器であったが、移り行く時代の変化に合わせて新しい分野で近代産業の芽が出てきたのである。その先発組が、置き時計、掛時計に代表される時計産業であった。

津田助左衛門が、代々尾張藩の御時計師および鍛冶頭（かじかしら）を勤めたことは前述した通りである。ところで、幕末になると、尾張藩の台所事情は、諸侯と同じく苦しくなり。特に下級武士は傘張り、ちょうちん張り、元結製造などの内職で家計を助けなければならなかった。こうした家内仕事が、地場産業として発展

していった例もある。米沢（山形）の箒（ほうき）、岐阜のちょうちん、名古屋の扇子、養鶏、七宝焼き、時計などがそれらにあたる。

時計は、飾職が手がけることが多かった。その飾職とは、かんざし、ブローチ、金具等の金属製品を作るための細工仕事をする職人のことで、武家の内職から始まったのである。時計の産業化は、助左衛門の技術を受け継ぐ技術者や飾職の存在が影響したものとみられる。

明治維新当時、林市老（初代林市兵衛）という時計商人が名古屋本町で林市兵衛商店を営んでいた。彼は、名古屋で生産された和時計（櫓時計）を売るかたわら、「洋製時辰機」と呼ばれた米国製のボンボン時計を中部地方で独占販売していた。この輸入時計の売れ行きは、好調で、息子の竹松（後の二代目市兵衛）が、時計の製造を考え出した。1883（明治16）年、親子は、名古屋で最も優れた飾り職人を募集し、時計製造のための機械の生産にメドをつけるのである。1886年になると歯車もかみあい、正確な時刻を示せる掛時計の中核部分の企業化に成功し、1887（明治20）年に杉の町に工場を新設した。社名は、「時盛社」、商標は、“日の出鶴印”で名古屋初の掛時計を製造する会社であった<sup>4)</sup>。

時盛社は、掛時計製造する際に使う歯割機械、直挽き機械、穴あけ機械などを自社で開発し、後には動力に蒸気機関を使用するなどの工夫の末に事業を拡大するのである。時盛社は、

表1 明治後半期の名古屋の時計会社数

時代	明治35年	同36年	同37年	同38年	同39年	同40年	同41年	同42年	同43年	同44年
製造戸数	14戸	15戸	14戸	14戸	15戸	16戸	18戸	17戸	19戸	18戸
職工数	710人	683人	622人	1,025人	1,025人	1,045人	820人	835人	802人	744人

出所：「明治・名古屋の顔」六法出版社、p138

1911（明治44）年5月、資本金5万円の株式会社になり、林時計株式会社と称した。

これがきっかけとなって、名古屋で時計づくりを志す者が増えた。名古屋市中区東橋町に住んでいた飾職の水野伊兵衛、長谷川喜七は、1892（明治25）年、時計工場である「水野時計製造所」を設立した。同じ町内に財産家の五明良平が住んでいた。五明は、水野時計製造所に目をつけ、合弁会社の設立を持ちかけた。こうして、資本金2万円の「愛知時計電機製造合資会社」が、1893年年末に誕生したのである。この会社が、今日の愛知時計電機株式会社の前身で、中京財界に大きな影響を与えることになる。

時盛社の成功に刺激され、その後名古屋で時計を手がけるものが相次いだのである。1894（明治27）年、名古屋・伊勢町に加藤時計製造所、翌年には、同前津小林町に明治時計製造所、1896（明治29）年名古屋・下笹島に尾張時

計合資会社、城番町に水野時計製造所（経営者水野信次郎）がそれぞれ誕生した。1898年頃に名古屋の時計メーカーは、18カ所、大阪5カ所、東京、京都に各3カ所など全国で30カ所を数えたという。

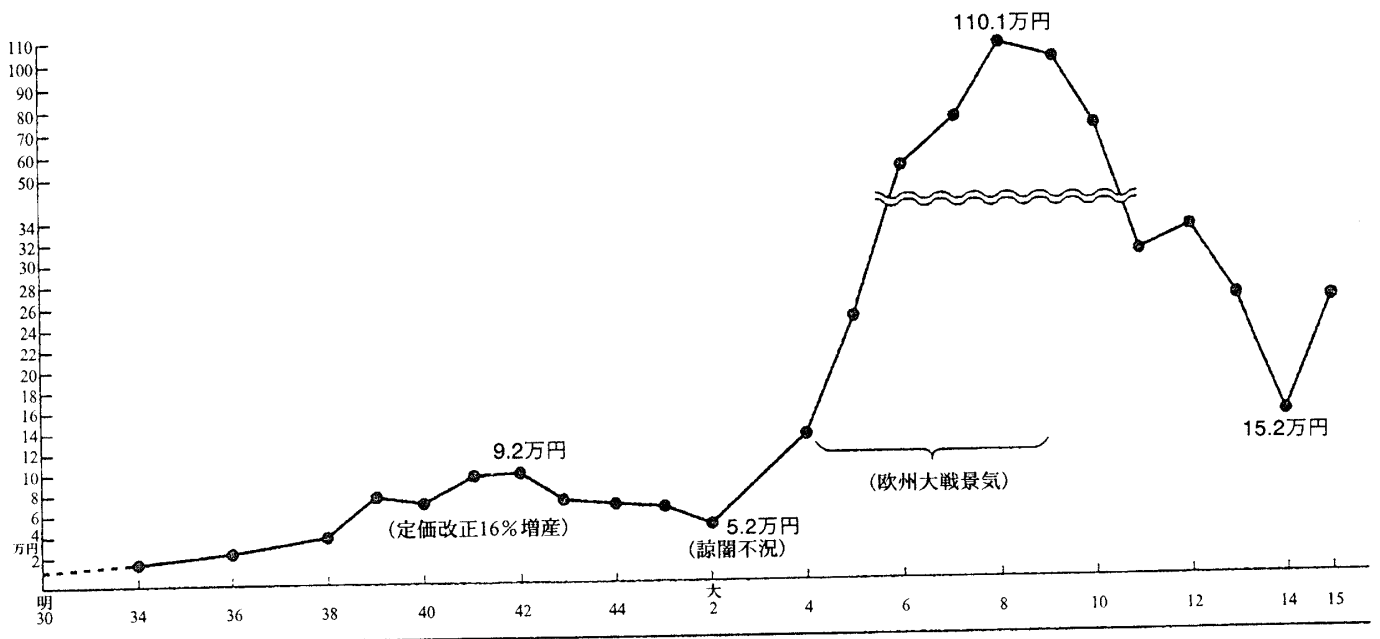
## 二 楽器の製造

### イ 鈴木バイオリンの誕生

鈴木バイオリンが初めて作られたのは、1887（明治20）年11月である。創業者の鈴木政吉は、1859（安政6）年名古屋市中区宮出町に生まれた。父正春は、尾張藩の軽輩で琴、三味線づくりをしていた。政吉は、14歳の時に従姉の嫁ぎ先である東京・浅草の塗り物商、飛騨屋の奉公人となった。3年の間にここで覚えた漆塗りの感覚が、後のバイオリンづくりに役立つのである<sup>5)</sup>。

1884（明治17）年、父が病死し、世の中が西洋化する時代にあって和楽器は斜陽化してい

表2 明治・大正期の名古屋地区ヴァイオリン生産額



出所：大野木吉兵衛『楽器産業における世襲経営の一原型——鈴木バイオリン製造株式会社の沿革』（I）  
〔備考〕大正5年までは鈴木バイオリン工場。同6年以降は他工場も含む。

く。そこで、政吉は、転身を決め名古屋師範学校の音楽教師、恒川鏝之助の指導を受け小学校の唱歌の教師を目指すことになった。こうして勉強するうちに、同門の甘利鉄吉から和製のバイオリンを見せてもらい魅了されてしまう。彼は、徹夜で寸法を取って一週間で作り上げ、第1号を恒川に見せたところ褒められ激励を受けた。1888（明治21）年初頭には、これに勢いを得て、第2号を製作し助手を雇うようになった。名古屋商工会議所「名古屋商工会議所工場要覧」（1935年）によれば、鈴木バイオリンの創業は、1888（明治21）年2月とされる。

こうして本業の琴、三味線の生産をやめて、バイオリンの製造に打ち込むのである。政吉の優れた点は、明治30年代初頭に大量生産が可能な設備を自社開発したことである。バイオリン頭部の渦巻き状の部分を作る鉋（かんな）削り機械の開発がそれである。輸入機械を見て、その必要性を感じ、6ヵ月をかけ自力で実用化した。その2年後には、バイオリンの表板（腹板）や裏板（背板に丸みを持たせる）の鉋削り機を発明している。独自に考案し、特許を得たこうした特殊専用機械は、従来の手作業から念願の大量生産方式を可能とし、1914年の第一次世界大戦後は従業員千名を越える企業に発展するのである。なぜならば、世界大戦によりドイツ、フランス、チェコなどの弦楽器メーカーが、壊滅的な打撃を受け、欧州からの生産が止まってしまったからである。

鈴木バイオリンは、バイオリンに加えて、マンドリン、ギター、ウクレレ、ヴィオラ、同弓、チェロ、同弓、ダブルバス、同弓等まで手を広げ世界的な楽器メーカーとなった。鈴木バイオリンにとって第二の転換期は、1930（昭和5）年、株式会社「鈴木バイオリン製造株式会社」（資本金50万円）としての再出発したことである。しかし、昭和初期の恐慌時代に鈴木バイオ

リンも激動の嵐に見舞われる。

不況のため社長の鈴木政吉は、楽器から洋家具、室内装飾、各種木工製品に切り替えるが、そうした努力もむなしく1932年に和議破産に追い込まれる。営業不振に加えて、頼みの主力銀行の明治銀行が前年3月に倒産し、万策尽きたのである。破産処理は、長男の梅雄があたり、会社債務を完済した後、バイオリンの販売に再び力を入れるのである。1934年3月には、政吉と当時仲がよく、名古屋財界で活躍していた下出義雄を社長に迎え再建を図る。義雄の父民義は、福沢諭吉の養子で電力王と呼ばれた福沢桃介の片腕として、明治時代に活躍した。

民義は、名古屋証券取引所の理事長としても、その手腕を発揮し、東邦商業学校（現東邦高等学校）の創立者としても知られている。子息の義雄は、木曾川電力や大同製鋼（現大同特殊鋼）社長を歴任した。1941（昭和16）年3月、梅雄は、会社再建の恩人、下出義雄から社長の座を譲り受けた。第二次大戦中は岐阜県恵那郡へ疎開していたが、1947（昭和22）年に現在の本社所在地、名古屋市中川区広川に本社工場を移しバイオリン、ギターの生産を再開し今日に至っている。

ロ 浜松にヤマハ（旧日本楽器）が生まれる  
ヤマハの創業は、鈴木バイオリンと同じ明治21年である。ヤマハは、翌年に合資会社、創業から9年後の明治30年に株式会社化している。鈴木政吉とヤマハの創業者である山葉寅楠（とらくす）は、楽器の販売店が共通していたこともあって生涯にわたり無二の親友であった。寅楠は、鈴木政吉の8歳年長であった。これに対して、鈴木バイオリンが、法人化したのは、42年後の昭和5年である。

日本の楽器メーカーは、1979（昭和5）年に156社あったが、明治時代初頭の設立以来、存

続しているのはヤマハと鈴木バイオリンの2社だけである<sup>6)</sup>。ヤマハの歴史は、浜松尋常小学校のオルガン修理に端を発している。1887（明治20）年、この小学校の唱歌科で使われていたオルガンの音がでなくなった。当時、米1斗が1円なのに比べ、アメリカから輸入したオルガンは45円もした超高級品であった。

困った校長は、地元には山葉寅楠という医療器械の修理技術者がいることを聞きつけ修理を頼んだのである。寅楠は、壊れていた2本のバネを直し再び音が出るのを見て、あることを思いついた。これからオルガンは、全国の学校に設置されるだろう。それならば、高い輸入品を買うより国産のオルガンを自分の手で作ろうと考えたのである。寅楠は、その時、35歳であった。

彼は、飾り職人の河合喜三郎に相談を持ちかけ製作に取りかかった。機械や材料を含めた試作費用200円は、すべて河合が私財を売り払い調達した。寅楠が、修理を依頼されてから2ヵ月後にできたオルガンを東京の音楽取調所（現在の東京藝術大学音楽部）で審査を受けることになった。当時、東海道線は、開通しておらず、2人は、天秤棒でオルガンをかつぎ箱根の山を越えるという難行を経験した<sup>7,8)</sup>。

こうした労苦を経て、寅楠は、1888年3月、浜松市菅原町の廃寺に「山葉風琴製造所」を立ち上げたのである。1899（明治32）年、彼は、渡米しピアノ工場を見学し、部品と機械を購入して念願のピアノづくりに乗り出すのである。その後、1916（大正5）年になると、山葉寅楠、河合喜三郎は、相次いで亡くなり副社長の天野千代丸が二代目社長に就任した。しかし、1926（大正15）年4月、会社と労働組合が待遇改善をめぐる争議に突入、105日間にわたるストライキとなった。8月8日、争議は終結したが、映画の東宝争議、石炭の三井三池争議と

並ぶ太平洋戦争後の日本3大ストライキに数えられているほどである。

会社経営は、長期の争議による営業の損失や志気の低下で経営難となった。経営陣は、社長派と改革を主張する反社長派にわかれ、收拾がつかず住友電線製造所（現在の住友電工）取締役の川上嘉市に社長就任を要請した。1927（昭和2）年1月、42歳で社長になった川上は、東京帝国大学を卒業後、東京瓦斯を経て住友電線へ引き抜かれた秀才であった。時代は、昭和の大恐慌を経て、次第に戦時色の濃い暗い道へ進んでいき、プロペラや補助タンク生産の比重が高くなっていった。

1949（昭和24）年1月、川上嘉市は、病に倒れ、翌年9月長男の源一が38歳の若さで四代目社長に就任した。ヤマハ中興の祖といわれる源一は、楽器部門では、エレクトーンの開発、コンサートグランドピアノの誕生、ヤマハ音楽教室の全国展開などを進め、また、オートバイ生産を契機にヤマハ発動機の設立、FRP（ガラス繊維強化プラスチック）技術を生かしたスポーツ用品、家具などの多角経営を行なった。さらに、三重県下にリゾート施設「合歓の郷」（ねむのさと）、静岡県掛川市に会員制のレクリエーション施設「つま恋」等へ手を広げた。

1977（昭和52）年1月、川上源一は、会長になり社長の座を本田技研工業にいた河島博に譲るが、3年後の1980年に再び六代目社長に復帰する。原因は、経営路線の食い違いで、1983年には、長男の浩を社長に据えた。浩は日本大学理工学を卒業後、ソニーに就職しており、41歳であった。

#### ハ ヤマハと鈴木バイオリン

両社は、ともに創設が1888年、現在もバイオリン、ピアノにおいてトップメーカーである。中部地区は、この二つの会社を核として日本で



の楽器産地として発展した。両社に共通するのは、同族経営が色濃いことである。ヤマハは、三代目社長、川上嘉市の長男で、同社中興の祖といわれる川上源一からその長男の浩へと典型的な親子継承の流れである。

一方、鈴木バイオリンのほうは、鈴木政吉から長男、梅雄、梅雄の次男である秩（さとし）へと引き継がれている。しかし、現在の会社規模には、大きな差異がある。ヤマハの2002年3月期の連結年間売上高は、5,044億円、鈴木バイオリンは、年間売上高10億円である。

この違いを生んだ原因は、何かについて考えてみたい。第一に考えられることは、出発した時の商品である。ピアノとバイオリンでは、価格の差が大きい、さらに普及する度合いがピアノのほうが汎用である。第二に考えられる点は、ヤマハの川上源一による拡大路線である。源一は、高度成長期にエレクトーンからレジャーまで一定の成功をおさめた。これに対して鈴木政吉の子息は、長男、次男が経営にたずさわったほかは、三男以下が「鈴木弦楽四重奏団」を結成、演奏家活動を本業とするなど弦楽器一筋である<sup>9)</sup>。

### 三 鉄道、港湾の整備

#### イ 武豊線の開通

1886（明治19）年3月1日、武豊線（熱田～武豊間）が開通した。同線は、33・6km、愛知県で最初に敷設された鉄道である。すでに明治初期に東京・新橋～横浜間、大阪～神戸間が開通しており、次に明治政府は、関東、関西を結ぶ幹線鉄道を建設しようとしていた。当初、考えられた線路は、現在の中央自動車高速道路沿いの中山鉄道案であった。後になって現東海道線が政府案となり、建設されたが、武豊線は、この東西をつなぐ幹線鉄道の資材運搬用路線として浮上した。

鉄道敷設用の資材は、先ず、神戸に荷揚げしその後琵琶湖を船で輸送し、工事現場まで運ぶ必要があった。しかし、このような方法では、時間と費用がかさむため、資材を船舶で伊勢湾の港に運んでから、鉄道で工事現場へ持ってくる案が浮上した。

岐阜県大垣方面へ資材を陸揚げする候補地として有力地にあがったのが、愛知県の武豊と三重県の四日市である。最終的に場所を決める際に、四日市の場合は、養老山脈の裾野を走らねばならず、平坦な地形でないことと揖斐川を沿って走り橋も必要とわかった。これに対して、武豊から名古屋へは、登り下りもほとんどなく、大きな橋も不要であることから本決まりとなった。

また、武豊線は、貨物線としてだけでなく、開通すれば、旅客の乗車が見込まれ採算に寄与することが影響した。開通当初の駅は、南から順に6つの駅であった。武豊、半田、亀崎、緒川、大高、熱田で武豊線は、その後、熱田～名古屋、名古屋～敦賀へと延長され半田を中心とする知多半島の経済、産業に大きな影響を与えたのである。

同線は、県下で初の鉄道だけに初めての大きな事故も起きた。1891（明治24）年7月、半田市成岩町の踏み切りで列車と乗合い馬車が衝突し、5名が死亡、数名が怪我をした。踏切り番をしていた女性が、ばくちに気を取られ遮断機を下ろすのを忘れたからだという<sup>10)</sup>。東海道線の木曾川～加納間が、完成したのは1987（明治20）年、全線開通は1889年である。

ちなみに私鉄の関西鉄道が、1898（明治31）年、名古屋～大阪間を開通させている。同線は、国が経営する東海道線と激しい乗客の奪い合いをし、名古屋商工会議所が過当競争を止めるように逓信大臣に建議するほどであった。しかし、この路線は、1906年に国有化され第二の

幹線、関西線と生れ替わった。さらに、東海道線と建設の優先順位を争った中山鉄道案は、1900（明治33）年に名古屋～東京間が完成し、中部と東西を結ぶ3つの幹線鉄道網が整ったのである。

#### ロ 武豊港の開港

武豊線が開通して間もない1890（明治23）年、武豊港を開港場（特別輸出港）にしようという動きが地元や愛知県議会から起こった。中川常太郎武豊村長らが武豊港を開港場にするよう帝国議会に請願した。愛知県議会は、武豊港に限って、営業税や雑種税を特別に免除するよう帝国議会に建議したのを受けの行動であった。帝国議会は、この建議を審議しなかったが、1899（明治32）年8月勅令により開港場に指定され、大阪税関武豊税関支所が開設された。

熱田港が、名古屋港と名前を変えて開港場となったのは1907（明治40）年11月である。知多半島は、東海道線に先立つ武豊線、名古屋港より8年も早い武豊港の開港場指定と社会基盤の整備がいち早く進んだ地方であることがわかる。日本は、島国であり古来、海外文化の移入口は港であった。徳川の鎖国時代は、長崎・出島であり、明治維新以降は、港のある町の神戸、横浜が窓口であった。

知多半島では、江戸時代から千石帆前船による半田から江戸に至る江戸航路が開かれ、酢、酒などを運んでいた。陸路ならば不便と考えられていた知多半島は、武豊線や武豊港のいち早い整備もあって江戸時代から明治初頭まで中央の最先端の動きをつかむことができたのである。

#### ハ ビールづくりの動き

中埜酢店（愛知県半田市）の四代当主、中埜

又左衛門は、1885（明治18）年にビールの生産を企てた。中埜酢店は、酢を江戸時代から関東方面で販売しており、東京、横浜などでビールの売れ行きが良いことを耳に挟んだらしい。早速、甥にあたる盛田善平を呼び、ビールの市場調査を頼んだ。

善平は、当時22歳、愛知県知多郡小鈴谷村（現常滑市小鈴谷）に現在も続く造り酒屋、盛田久左衛門家の分家の5男であった。自家も酒を造っていたが、2年前に廃業しており、時間が取れるのを見越しての依頼であった。善平は、東京に出て、ジャパン・ブルーワリー（キリンビールの工場）を見たり神戸を訪れるなどして調査した。善平は、神戸で英国バース・ビール社の醸造免許を持った中国人を半田へ連れてくる約束までして「見込みのある事業である」と又左衛門に報告した<sup>11)</sup>。

実をいうと、このビールづくりの考えは、盛田家本家、十一代久左衛門から出ていることは前述した通りである<sup>12)</sup>。彼は、ぶどう酒やビールづくりに挑戦したが、資金難から断念し、その意思が四代目中埜又左衛門に引き継がれたのである。1892（明治25）年には、“丸三ビール”の商品名で大量生産できるまでになった。1898年には、ドイツから機械技師や醸造の専門家を招聘し、11月に、半田市榎下に新工場を建設した。本格的なドイツビール“加富登麦酒”の誕生であった。

このビールは、関西地方では、キリン、サッポロ、アサヒの大手メーカーと張り合うほどの売れ行きを見せたが、最終的には、大日本麦酒に買収されてしまうのである。半田市榎下には、レンガづくり5階建ての建物（5,450平方<sup>2</sup>）が現存し半田市が保存を図っている。

#### 四 基幹産業の台頭

1886（明治19）年に名古屋株式取引所（現在

の名古屋証券取引所)が、続いて1890年には、名古屋商業会議所(現名古屋商工会議所)が設立されるなど経済関連の団体整備が進んでいる。こうした産業振興を支援する機運を背景に機械、電力、ガスなどの基幹産業の台頭が目立ってくるのである。

#### イ 名古屋電燈の起こり

明治維新の改革により、旧藩士は、碌がなくなり生活が困窮した。1877(明治10)年に発生した西南の役は、こうした旧武士階級の不満の爆発であった。旧尾張藩士族も例外でなく、彼らの復讐請願の運動は、猛烈となった。このため政府は、100万円の勸業資金を下附し、起業を促し、うち10万円の貸付けが愛知県に内定した。

三浦惠民は、旧名古屋藩士卒族総代として、運動に奔走した。さて、起業の方法であるが、養蚕、紡績とか諸説が述べられなかなか結論が出なかった。ちょうどその頃、同じく旧名古屋藩士で愛知県衛生課長に任ぜられた丹羽精五郎が、電燈経営の利を説き皆が耳を傾けた。1886年、丹羽精五郎の甥にあたる丹羽正道が、三重県津市で開かれた日本赤十字社支部総会に招かれる機会があった。彼は、工科大学の学生であったが、その支部総会に小型発電機を持参し、電灯をつける計画であった。これを聞いた旧士族達が、正道を名古屋に招聘し、栄の名古屋区役所に白熱燈40個、門前町に弧光燈1個を点灯してもらった。この結果、電灯事業を経営するのが、最善であるという結論になり、愛知県下に割り当てられた勸業資金10万円のうち、一部を起業資金として愛知物産組に貸与、このほかの75,000円は士族卒族に貸し付けられた。愛知物産組とは、1878(明治11)年に士族の婦女子授産のため工場を設置し、木綿織物を生産していた。

勝間田愛知県知事は、旧藩士のみ経営では、先が危ういとして、実業家との共同経営を条件とした。このため資本金を20万円とし、1株100円の株式2千株のうち、旧藩士が736株を引き受け残りは公募と決まったのである。1887(明治20)年9月、名古屋電燈は、東京電燈に次ぐ日本で2番目の電燈会社として設立された。発起人は、実業界の次の11名であった。瀧兵右衛門、小出とも、春日井丈右衛門、八木平兵衛、森本善七、瀧定助、近藤友右衛門、見田七右衛門、靱山吉次郎、加藤彦兵衛、奥田正香<sup>13)</sup>。

ところが、1887年3月に設立となった尾張紡績の資金が、かさんで実業界からの出資が断られる破目になり、発起人の11名は脱会するのである。やむなく、社長を旧藩士代表の三浦惠民、技術主任は丹羽正道とし、その後、丹羽精五郎、正道が、渡米し、白熱電球を発明したエジソンに会うなどして、開業準備を進めていた。1889年12月に名古屋電燈は、送電を開始した。当日の点灯戸数は、400余戸、電柱の数、391本、電線の延長は3里24町余とある<sup>14)</sup>。

#### ロ 愛知電燈との合併

1891(明治24)年、濃尾大地震が、起き尾張紡績の工場が倒壊するなどの被害が出た。さらに翌年から大須の大火などの火災が頻発し、これの原因が石油ランプ、ろうそくの火であったため電燈に対する需要が急増したのである。しかし、名古屋電燈の経営者は、元武士であり“武家の商法”が目立った。その例が、大須の旭廓の営業主による団体割引を断ったことである。旭廓は、大火にこりて、石油ランプの使用をやめ電燈使用を決め、旭廓の使用料金の特別割引を交渉した。

これに対して、名古屋電燈の経営陣は、「本社の規定を曲げることはできない」と断ってし

まった。怒った営業主達は、有力者の佐治儀助、角田幸右衛門らと交渉し、旭廓の需要から営業しても採算があうと見込み、1894（明治27）年3月に免許を取ってしまった。同社は、本社および発電所を愛知県愛知郡那古野村大字広井に置き、同年11月から営業を始めた。この頃、石炭価格の上昇や需要増大に備え、火力から水力発電への切り替えも課題となっていた。1895（明治28）年11月、神戸市で日本電気協会第8回総会が開かれた。席上で、「名古屋市のような市に2個の電燈会社が並立するのは、様々な危険がある。両社の合併が望ましい」旨の決議がなされた。

この決議に従い、京都電燈社長大沢善助、大阪加島電機工場長加島信成、日本電気協会本部主記兼主計丘襄二の3氏が、來名し名古屋電燈、愛知電燈を回った。この結果、両社の合併が了承され、名古屋電燈の資本金16万円、愛知電燈の15万円に加え、19万円の増資を行ない、50万円の資本金で設備を増強し需要に応えることになったのである。1896（明治29）年3月、名古屋電燈が、愛知電燈を合併し愛知電燈は開業後、わずか1年余で姿を消した。

#### ハ 東海電気との合併

1899（明治32）年3月、愛知県三河の矢作川の支流である田代川の水力を利用して発電し、愛知県東春日井郡瀬戸町に電燈を供給する目的で東海電気株式会社が設立された。創立願いは、矢作川電力株式会社、その後三河電力に社名変更し、東海電気に替わっている。ところが、同社は、1904（明治37）年1月からは名古屋市内でも電燈供給を始め名古屋電燈と競合した。名古屋電燈は、料金で不利であった。例えば、終夜燈で10燭光が85銭、16燭光が1円20銭に対して、東海電気は、それぞれ65銭、1円4銭という具合であった。競争は、愛知電燈との

それを上回り、お互いに停電でもすればお客を奪われないように顧客のところへ社員がろうそくを持って走るくらいであった。このため、両社の首脳陣の間では、これ以上の競合を避けて合併への道を探る動きが出てきた。

1904年には、日露戦争が起き電力需要は増加しているが、1906年10月、奥田正香らにより名古屋電力が設立されている。名古屋電力は、木曾川に八百津水力発電所を建設し、完成後は名古屋市内で供給を予定していた。東海電気では、当初、名古屋電力と合併する動きがみられたが、結局、同年12月、名古屋電燈と合併した。契約条項は、東海電気の資本金25万円（全額払込み済み5万株）に対し、名古屋電燈は、新たに発行する50万円全額払込み済みの株式5万株と、ほかに1株につき25円宛て、この合計金12万5千円および合併費用2万5千円を東海電気に交付するというものであった<sup>15)</sup>。

#### ニ 名古屋電力の登場

1906年10月22日、名古屋電力は、名古屋商業会議所で創立総会を開いた。木曾川八百津の児玉莊太郎、三浦菊次郎、岐阜県選出の衆議院議員兼松熙らが、八百津町に水力発電所を建設する計画を立て、名古屋商業会議所会頭の奥田や東京の資本家に相談した。この結果、資本金500万円を東京、名古屋折半で出資し、木曾川の水流を利用し電燈電力を供給することになった。奥田ら発起人13名のうち、名古屋の需要家代表として、上遠野富之助は日本車輛を、斎藤恒三は三重紡績、白石半助は名古屋電気鉄道をそれぞれ代表していたのである。

名古屋電燈からは、三浦惠民常務が発起人に加わっていたが、同種の会社の発起人となるのは「商法違反」との声があり脱退している。これを機に、名古屋電燈は、単独で水力発電工事を決意し、1908（明治41）年、長良川の工事に

着手し、名古屋電力との確執の始まりとなる。名古屋電燈の建設工事は、日露戦争後の不況で資金が集まらず1年半中止を余儀なくされた。起工式は、1908（明治41）年6月に行なわれ着工したが、地形、地質などの悪条件が重なり難渋した。

#### ホ 名古屋電燈の多難時代

1907（明治40）年から1914（大正）年までは、名古屋電燈にとって最も多難な時代であった。1908年6月に起工式をあげた長良川水力発電所工事は、多額の資金を要したが、株式の暴落もあり、容易に集まらなかった。止む無く明治生命保険や東京海上保険からそれぞれ30万円、20万円を借入れた。さらに生じた資金不足は、両保険会社から合計150万円を借りざるを得なかった。

こうした折に、社内は、重役を信任する同盟会と一大革新をすべしという革新会に分かれて反目しあった。さらに、元本社事務員の平井直矩からは、先の50万円を借入れる際に開いた臨時株主総会の決議が無効であるとの訴訟が起こされた。50万円使用に関する記載が、ないのがその理由であった。会社は、名古屋地方裁判所、名古屋控訴院で敗れ、ようやく大審院で勝訴となった。たまたま、本社の使用人が、1,800円余を使い込みする事件があり、これは会社で弁償した。社内は、「伏魔殿」とまでいわれる始末であった。そのうち、株主の一人八木元三ほか85名が、1903年から1908年にわたる業務の状況を調査するよう名古屋地方裁判所に申請した。理由の中には、1903年上半期の事業報告書によると、総発電量は前期比2割3分強増えているのに、営業収入が3分しか増えていないのは、計算がおかしくないかとの指摘もあった。

名古屋地方裁判所は、1908年11月、三井銀行

名古屋支店長の矢田績、弁護士の大喜多寅之助、山田豊の3名を検査役に選任した。これに対して名古屋電燈は、検査役は必要なしと抗告したが認められなかった。矢田らは、12月から翌年の3月まで6回来社し、会計帳簿を人力車2台に満載して、取寄せ夜はこれを三井銀行支店の金庫に保管し安全を期するほどであった。検査は、貯蔵品や天秤に不正があるや否まで詳しく調べた。しかし、不正は、何も見つからずに終わったのである。

#### へ 福沢桃助による名古屋電燈の買収工作

福沢諭吉の養子である桃助は、慶応義塾を卒業後、北海道炭鉱汽船（北炭と略す）入社、病氣療養後、株式売買を主とし相場師とも呼ばれる時期があった。彼は、浮き沈みのない職業を探していたが、紡績業は女工の使役問題があり、製糸事業は繭、蚕などの生き物を殺す殺生を嫌った。鉄道に触手が伸びたが、主な鉄道は、すでに国有化されており、友人松永安左工門との関係で電力に興味を持つに至ったのである。1906年11月、安左工衛門と桃助は、九州で地元資本と共同で設立した広瀧水力電気の大株主であった。その後、福博電気軌道の発起人となったり（1908年）、愛知県の豊橋電燈の大株主で取締役にもなるなど電気業界との関係を強めていたのである。

名古屋電燈は、1907年1月の臨時株主総会で、資本金を東海電気との合併を機会にこれまでの100万円から525万円に増資する計画を立てていた。ところが、株式業界は、2月に起きた恐慌で新株85,000株のうち、5,000株が浮いてしまった。1908年春、旧友矢田績と会った桃助は、矢田から名古屋電燈への投資を勧められる。この年の秋頃から桃助は、矢田と北炭時代に石炭仕入れで知り合った名古屋愛知石炭商会主の下出民義に買収交渉を依頼した。

当時、名古屋電燈の株式数は、10万五千株に過ぎず、浮動株も少なく市場から1万株以上を買い付けることは難しかった。1909年3月、桃助は、名古屋電燈の株主名簿に登録され、翌年前半期末までに、1万20株を取得し筆頭株主となったのである。ただ、この時、桃助は、名古屋の地理が、木曾川の恩恵をうける利便さを持ち合わせることや名古屋電燈の競争会社として名古屋電力があることすら念頭になかったらしい<sup>16)</sup>。1910(明治43)年5月、桃助は、常務に就任し、名古屋電力との合併工作を矢田績、下出民義とともに進めるのである。

#### ト 名古屋電力との合併

名古屋電力が、建設していた木曾川筋の八百津水力発電所は、出力1万キロワットに対して名古屋電燈の長良川発電所は五千キロワットの倍、資本金も名古屋電燈の二倍近い425万円であった。社長は、奥田正香以下、名古屋の実力者が多かった。一方、名古屋電力は、発電所の工事費が予想以上にかさんだこと、名古屋市内へ供給する際は、地中線化しなければならなかった。桃助の合併の呼びかけは、当初、名古屋電燈側から、配当が激減するとの理由で一致して反対された。

桃助は、名古屋電力の額面5万円(42円50銭払込み済み)の株式2株に対して、名古屋電燈の額面50円の株式1株(同)ずつ合計5万株(総額212万5千円)を交付し、これにより生ずる差益金212万5千円の大部分を配当補充金として、積立てることを条件とし同意にこぎつけたのである<sup>17)</sup>。1910年7月、名古屋電燈は、名古屋電力を合併し、1921(大正10)年、関西水力電気と合併、関西電気と改称する。1922年には、東邦電力と改め今日の中部電力に至るのである。尾張の地元資本は、紡績に続いて、電力でも中央の資本に組み入れられるのである。

桃助は、1910年11月、名古屋電燈常務を辞任し、東京へ帰る。しかし、1913(大正2)年再び名古屋電燈常務に帰り咲き、1914年には社長に就任している。彼は、この年に愛知電気鉄道社長になっているほか1917年には電気製鋼所(現大同特殊鋼)社長に就くなど名古屋で縦横の活躍をするのである。

敬称略(続く)

#### 〈注〉

- 1) 塚本学、新井喜久夫『愛知県の歴史』山川出版社、1973年、p137~141
- 2) 前掲書『愛知県の歴史』p168~169
- 3) 愛知県郷土史研究会『愛知県の歴史』光文書院、1980年、p122~123
- 4) 『愛知時計電機85年史』愛知時計電機85年史編纂委員会、1984年、p10、服部鉦太郎『明治・名古屋の顔』六法出版社、1973年、p136~137
- 5) 大野木吉兵衛『楽器産業における世襲経営の一原型(Ⅰ)』—鈴木バイオリン製造株式会社の沿革—、浜松短期大学研究論集第24号、抜刷、1981年、p4~5
- 6) 『全国楽器協会会員名簿』全国楽器協会、1979年
- 7) 『ヤマハ100年史』ヤマハ株式会社100年史編纂委員会、1987年、p3~4
- 8) 大野木吉兵衛『日本楽器製造株式会社と山葉寅楠の企業者活動』浜松短期大学研究論集第9号、1946年抜刷、p012~13  
ヤマハ100年史によると、河合喜三郎が、全財産を投げ出し寅楠の起業を助けるためその資金を出したとある。しかし、大野木によると、浜松の福島豊策病院長(病院名は明らかでない)が、第一の同志であり、家屋敷を抵当に資本を捻出したのは、福島とある。どちらが、本当か今後の調査に待ちたい。
- 9) 『楽器産業における世襲経営の一原型(Ⅱ)』—鈴木バイオリン製造株式会社の沿革—、浜松短期大学論集第25号、抜刷、1982年、p2~17
- 10) 『図説愛知県の歴史』河出書房新社、1987年、p238
- 11) 安保邦彦『敷島製パン80年の歩み』敷島製パン株式会社、2002年、p23~30
- 12) 安保邦彦『東邦学誌』第31巻第2号、東邦学園大学・東邦学園短期大学、2002年、p5~6

- 13) 稿本『名古屋電燈株式会社史』東邦電力株式会社  
社内名古屋電燈株式会社史編纂員、1927年  
『同稿本の復刻刊行版』(400部) 中部電力株式  
会社能力開発センター、1989年、p 1~11  
稿本『名古屋電燈株式会社史』は、旧東邦電力  
株式会社内に設けられた社史編纂員によってまと  
められた。創業から1914年(大正2年)頃までの  
歩みを直流、火力交流、水力の3つの時代にわけ  
3編に記録している。しかし、名古屋電燈は、  
1921年、関西電力電気に合併されるまで存続して  
いる。従って、社史としては、未完成であるが、  
ほかに代わるものが存在しない。また、傷みがひ  
どくなったため名古屋電燈株式会社が点灯して100  
年となるのを記念して、1989年に復刻版の刊行が  
なされたのである。引用は、この復刻版による。
- 14) 前掲書稿本『名古屋電燈株式会社史』 p 29  
15) 前掲書稿本『名古屋電燈株式会社史』 p 95  
16) 前掲書稿本『名古屋電燈株式会社史』 p 160~163  
17) 前掲書稿本『名古屋電燈株式会社史』 p 169

## 参考文献

- 稿本『名古屋電燈株式会社史』東邦電力株式会  
社内名古屋電燈株式会社史編纂員、1927年  
『東洋紡績七十年史』東洋紡績七十年史編修委  
員会、1953年  
大野木吉兵衛『日本楽器製造株式会社と山葉寅  
楠の企業者活動』浜松短期大学研究論集第9  
号、1966年  
塚本学『愛知県の歴史』山川出版社、1970年  
林董一『名古屋商人史話』名古屋市教育委員会  
文化財叢書第67号、1975年  
江藤恭二『わたしたちの愛知県史』愛知県郷土  
資料刊行会、1976年  
相賀徹夫『原色日本の美術』第22巻、(陶芸)  
小学館、1978年  
三浦小春『中部の焼きもの』中日新聞社、1981  
年  
大野木吉兵衛『楽器産業における世襲経営の一  
原型(Ⅰ)』-鈴木バイオリン製造株式会社の  
沿革-、浜松短期大学研究論集第24号、1981年

- 同上(Ⅱ)、浜松短期大学研究論集第25号、  
1982年  
『尾張の工業とくらし』愛知県社会科教育研究  
会尾張部会、1984年  
『愛知時計電機85年史』愛知時計電機85年史編  
纂委員会、1984年  
平井東幸、岩崎博芳『繊維業界』教育社新書、  
1985年  
『あいちの産業遺産を歩く』愛知の産業遺跡・  
遺物調査保存研究会編、中日新聞社、1988年  
亀田忠男『中部型企業の生成と風土』中部開発  
センター、1996年  
『七人の又左衛門』中埜酢店、1987年  
城山三郎『創意に生きる中京財界史』文芸春  
秋、1997年  
『新修名古屋市史』第3巻、名古屋市、1999年  
同上 第4巻 同 1999年  
安保邦彦『敷島製パン80年の歩み』敷島製パ  
ン、2002年

## 中部産業史の年表

- 8－12世紀 愛知県瀬戸市（現在の）での赤津焼き、伊賀焼き、美濃焼き、常滑焼きなどが各地で活発になる
- 1610年 名古屋城築城、清洲（現在の愛知県西春日井郡清洲町、織田信長ゆかりの地）、駿河（現在の静岡県）から名古屋へ商人（御用達）が移住し始める。いわゆる“清洲越え”である。同じような移住は、金沢でもみられる。金沢の中心地に“尾張町”が現存する。松坂屋などが清洲越え
- 1611（慶長16）年 伊藤次郎左衛門が松坂屋の前身となる呉服屋（伊藤呉服店）を名古屋の栄に開業。同家は、1881（明治14）年に伊藤銀行を開業している
- 1610年から4年間をかけた名古屋城築城の際、熱田の港から名古屋城まで掘削した全長6,200mの運河が堀川である。堀川一帯には、商家、倉庫、製材の加工工場が並んで木材に関する運輸、金融、流通、加工、製造の中心地であった
- 18世紀 三河に続き尾西地方などで綿織物が盛んになる。（三河地方では15世紀後半に木綿の生産をしていた）
- 1804（文化元）年 初代中野又左衛門が酒づくりのかたわら粕酢の製造を始めた。その後4代目又左衛門が中埜に改めた。七代目又左衛門は、襲名にあたって又左工門を名乗ることを条件とした
- 1807（文化4）年 加藤民吉が九州での修業から瀬戸市へ帰り、染付焼きの技術を広め、瀬戸地区で磁器量産へ
- 1868年 明治維新
- 1871（明治4）年 名古屋藩は名古屋県となる
- 1872（明治5）年 愛知県と改称、名古屋は「名古屋区」と行政区分された
- 1877（明治10）年～78年 第八、第十六、第百五の3国立銀行設立
- 1881（明治14）年 日本初の官営の模範機械化紡績工場である愛知紡績所が現在の愛知県岡崎市に開業。1885（明治18）年の名古屋紡績操業以降、近代的な民営の紡績会社設立が中部地でも続く
- 岡谷惣助ら名古屋紡績設立、1985年に操業
- 伊藤銀行設立
- 1882（明治15）年 名古屋銀行設立、頭取瀧兵右衛門
- 1883（明治16）年 渋沢栄一らにより大阪紡績設立される、資本金28万円、15,000錘
- 1885（明治17）年 半田の中埜又左衛門、ビールの試作へ、甥の盛田善平（後の敷島製パンの創業者）、22歳の時にビールの市場調査のため東京、横浜、神戸へ
- 林市兵衛、時計製造に成功し、2年後、名古屋に製造所を設立



- 1886 (明治19) 年 三重の伊藤伝七、三重紡績設立  
武豊線開通  
名古屋株式取引所 (現名古屋証券取引所) 設立
- 1887 (明治20年) 瀧兵右衛門ら尾張紡績設立  
名古屋電灯設立
- 1888 (明治21) 年 山葉寅楠と河合喜三郎が浜松でオルガンの製作を始める  
鈴木政吉、バイオリンの製作を開始
- 1889 (明治22) 年 名古屋市制施行  
東海道線全通  
名古屋電燈送電開始
- 1890 (明治23) 年 名古屋商業会議所発足  
森村市左衛門、名古屋に出張所を設ける
- 1891 (明治24) 年 名古屋屋商業会議所第1回会員選挙、初代会頭奥田正香 (辞退)  
濃尾大地震
- 1892 (明治25) 年 大須出火
- 1893 (明治26) 年 奥田正香、名古屋商業会議所会頭になる
- 1894 (明治27) 年 愛知電燈設立免許  
愛知馬車鉄道設立免許
- 1895 (明治28) 年 豊田佐吉、名古屋へ移る
- 1896 (明治29) 年 名古屋電燈、愛知電燈を合併  
愛知銀行設立免許  
明治銀行設立免許  
日本車輛設立免許
- 1897 (明治30) 年 大隈栄一、名古屋へ移住  
豊田佐吉、木製動力織機を完成
- 1898 (明治31) 年 大隈麵機商会設立
- 1899 (明治32) 年 東海電気設立
- 1904 (明治37) 年 日本陶器合名会社設立
- 1905 (明治38) 年 矢田績、三井銀行名古屋支店長となる  
名古屋紡績、尾張紡績が三重紡績に合併、1907年までに名古屋・三重地区の紡績会社は三重紡績に集約される
- 1906 (明治39) 年 名古屋電力設立  
名古屋瓦斯設立  
名古屋電燈、東海電気を合併
- 1908 (明治41) 年 名古屋地方裁判所、矢田績らを名古屋電燈業務内容の検査役に選任

- 1909（明治42）年 福沢桃助、名古屋電燈の株主名簿に初めて記載される
- 1910（明治43）年 福沢桃助、5月に名古屋電燈常務取締役になるが、11月に辞任  
名古屋電燈、名古屋電力を合併
- 1913（大正2）年 福沢桃助、再度、名古屋電燈の常務取締役になる  
奥田正香、稲永疑獄事件の影響で名古屋商業会議所会頭を辞任
- 1914（大正3）年 福沢桃助、愛知電機鉄道社長に就任  
福沢桃助、名古屋電燈社長となる
- 1917（大正6年）福沢桃助、電気製鋼所社長となる